様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：３４４３７
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2016
課題番号：２６７８０４６３

研究課題名（和文）文字学習を見通した小学校低中学年における外国語活動カリキュラムの開発

研究課題名（英文）Research and Development of the Curriculum of English in Early Stages of Elementary School: Focused on Phonemic Awareness and Learning of Spelling.

研究代表者
赤沢　真世（AKAZAWA, Masayo）

大阪成蹊大学・教育学部・准教授

研究者番号：６０５０８４３０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では小学校低中学年からの英語の文字学習をいかに進めるべきかを検討した。まず入門期英語教育における「文字への気付き」を高める指導をめぐる理論的研究では、子どもの言語発達の段階を踏まえて、丁寧な音韻認識能力の育成の重要性や質的なつまずき分析を行うことの重要性が示された。
　さらに、国内の取り組みに目を向けた「文字への気付き」を軸としたカリキュラム試案の開発では、先進校の実践例より、言語経験の実践例、文字への気付きを促す言語環境、教師の働きかけ、具体的な評価方法を可視化するための教材・小冊子『小学校外国語活動えいごの文字はっけん！ノート』・「教師用指導パンフレット」を作成した。

研究成果の概要（英文）：　This study investigated how to design the teaching letters & phonemic awareness in English to Japanese students in elementary school. First this study showed it is important for children to develop Phonemic Awareness before learning Phonics and it is also indispensable for teachers to observe children’s progress and miscues of reading and writing letters closely.
Moreover, this study designed the curriculum of teaching letters and developing phonemic awareness, and made a leaflet as a learning material. This leaflet contains the methods of developing Phonemic Awareness through children’s language environment, and every steps to recognise the structure of a word (focused on onset and rime). By using this leaflet, teachers can make their lessons easily and also they can observe and check children’s progress with their writing notes on this leaflet as a portfolio.

研究分野：教育方法学

キーワード：外国語活動　文字学習　カリキュラム　フォニックス　音韻認識

１．研究開始当初の背景

2011 年 4 月より小学校外国語活動が始まり、中学入門期英語教育とのカリキュラムや指導方法の連携が課題となっている。とりわけ英語において文字と音声の関係は複雑で多様であり、文字を導入することはつまずきの原因にもなる。一方で子どもたちには、アルファベットを用いて読み書きをすることへの期待もある。こうした背景から、聞くこと・話すことの音声面が重視される外国語活動においても、読み書き活動につながる文字学習の必要性が叫ばれ始めている。

そこで近年注目されているのが、「phonics（フォニックス）」である。フォニックスとは「音素（phoneme）とアルファベット（alphabet）の結びつきを教えることで読む力を高めようとする方法（英語教育用語辞典、1999）」として認知されている。もともと英語圏における入門期英語教育において、フォニックス指導は文字学習の重要な基礎・土台として位置付けられている。日本においても、2008 年改訂学習指導要領を受け、中学校第一学年の検定教科書では、フォニックスを意識した導入部分が加えられ、外国語活動の副教材（『Hi、friends!1、2』）では、アルファベットを扱う単元の中に、音声と文字の関係をつなごうとする意図が読み取れる。しかしながら、外国語活動を通して、あるいは日常生活の中で、子どもが文字（アルファベット）に対してどのような意識を向け、何を理解しているのかについてはほとんど検討されないままであり、子どもの言語経験を尊重した文字学習が学校現場で展開されているとは言いがたい。

学校現場においても、2005 年ごろよりフォニックス指導の先進的な実践が行われはじめている。（例えば東仁美「音声中心のフォニックス指導－公立小学校高学年での文字導入の試み－」『聖学院大学論叢』第 18 巻，第 3 号，2005 年）。しかし，これらの多くは単発的な指導として導入しており、言語経験との連続性や小中連携という長期的な視野からカリキュラムを開発するものではない。その中で、村端五郎・高知県田野町幼小中連携英語教育研究会編『幼小中の連携で楽しい英語の文字学習』－10 年間の指導計画と 40 の活動事例－』（明治図書、2005 年）は、文字学習の小中連携に着目し、ローマ字と英語の文字学習の関連付けの重要性を示したり、文字への意識を促す実践的なゲームを紹介しており、英語文字学習の先行事例として最も充実したものだといえる。しかしながら、長期的なカリキュラム開発の際には，これまで子どもが蓄積してきた母語に関する知識・経験，音声中心の活動で得た英語に関する知識や経験，さらに生活経験をも含んだ総体としての「言語経験」を出発点とし、それらの関連をより丁寧に考慮する必要がある。

２．研究の目的

以上の研究的背景から、本研究では、これまで，1980 年代ごろよりアメリカで展開された，子どもの言語経験を尊重し，現実の言語活動における言語発達を重視した「ホール・ランゲージ（Whole Language，以下 WL とする）」というアプローチに着目し研究を進めてきた。WL は日本の小学校英語教育において注目されているものの，「子どもの言語経験を尊重した言語学習」という理念が紹介されるのみで，実践現場に即した具体的な検討はほとんど行われていなかった。

本研究の前段階においては，子どもの言語経験を尊重した WL が基礎的なスキルとしてのフォニックスをどのように位置づけ展開しているかを分析し、WL では絵本や本作りといった豊かな言語経験を通して、子どもが自ら文字や音声のつながりに意識化できる機会を豊富に設定すると同時に、教師が子どもの言語発達を丁寧に見取り、働きかけを行っていることを明らかにしてきた。こうした成果は実践現場における具体的な指針として引用され、すでに活用されている。

しかしながら同時に、小学校高学年での文字指導を左右するのは、異文化への気付き・理解を含むそれまでの言語経験や言語（母語・外国語）に対する意識であるにもかかわらず、学校現場ではその点が十分に検討されず、ローマ字学習（小３、国語）との連関の不十分さが指摘されている（本田勝久・小川和美・前田智美「ローマ字と小学校英語活動における有機的な連関」『大阪教育大学紀要第Ⅴ部門』第 56 巻 1 号、2007 年）。現在、低中学年では系統性を持たない歌やゲーム活動を単発的に展開していることが多い実態に対しても、低中学年の段階から長期的な視点で言語経験の蓄積を意識し、文字認識の発達を捉えた外国語活動の指針を提案することで、軸の通った外国語活動が展開できるのではないかと考えたのである。

３．研究の方法

こうした研究目的のもと，本研究は以下の二点を研究の柱とした。

(1)入門期英語教育における「文字への気付き」を高める指導をめぐる理論的研究

子どもの言語経験を重視するアプローチ（WL に代表される立場）において、入門期での「音素への気付き」や「文字への気付き」を高めるための指導内容や系統性を明らかにする。その際には、WL の理論と実践を中心としながら、第二言語教育における WL アプローチ（Freeman＆Freeman）および外国語教育における言語経験アプローチの研究をも対象とする。また、低中学年の言語発達段階や WL が依拠する言語発達理論

（Vygotsky, Halliday など）についても検討が必要である。さらに、大津由紀雄や三森ゆりかなどの言語学や言語技術教育の領域から提起される、母語と外国語の違いについて「ことばへの気付き」を促す外国語学習の主張についても分析を行う。

(2)小学校でのリサーチによる「文字への気付き」を軸としたカリキュラム試案の開発

低中学年から英語学習を始めている先進校や私立小学校の取り組みについて「文字への気付き」の軸から分析するとともに、授業観察により教員の指導方法および子どもの実態を調査する。とりわけ、文字指導を抽出的に行うのではなく、英語を通した豊かな言語経験・言語活動の「過程」での気付きを重視し、気付きを促進させる言語環境や教師の役割について浮き彫りにする。一方で、現在、低中学年では依然取組があまり進められていない公立小学校を対象に、取り組み状況や文字への気付きの実態を合わせて調査する（授業観察、実態調査）。先進校の取り組みと公立小学校での実態という両面から調査・分析することによって、最終的には、小学校低中学年の外国語活動を想定し、豊かな言語経験の実践例、文字への気付きを促す言語環境、教師の働きかけ、文字への気付きを見とる評価方法の全体を小冊子にまとめたカリキュラム試案を提案する。

(3)本研究の学術的な特色・独創的な点及び予想される結果と意義

本研究は，実践現場において具体的指針が望まれている小学校低学年・中学年における外国語活動のカリキュラムについて，とりわけ中学校以降の読み書き指導までをも視野に、英語文字への気付きを高める指導について明らかにしようとするものである。開発・実行においては，研究代表者が大学院博士課程より共同研究を行っていた京都市・京都府（教育委員会）や、現在研究調査に協力して頂いている彦根市等において、指導主事や現場の教員に検討、批正していただいた。また研究成果を関連学会で研究者のみならず現場教員に向けて発信すること，および各学校レベルに小冊子として配布することによって，より多くの実践現場において「文字への気付き」を高める外国語活動の具体的な指針の一つとして実行・検証される機会を得た。

４．研究成果

目的の（１）（２）において、次のような研究の成果を得た。

（１）入門期英語教育における「文字への気付き」を高める指導をめぐる理論的研究

26 年度においては、英語圏におけるフォニックス指導の前提となり、その後の読みの力を予測するとされる「Phonemic Awareness（音素への気付き、音韻認識能力）」および「Print Awareness (印字されたものへの気付き)」についての議論を収集し、検討を進めた。例えば、Yopp, H.K.や、C.Weaver といったホール・ランゲージの立場での原点といえる論者から現代の議論まで収集した。また日本において本テーマの理論紹介を行い、外国語活動の実践に結びつけたアレン玉井光江（2011）などの研究成果を検討した。さらに、子どもの言語経験を尊重し、その中で基礎的な文字学習のスキル（フォニックス）の指導を行うホール・ランゲージ（Whole Language）no 実践について、中心的な実践を展開したアリゾナ大学の K.Goodman＆Y.Goodman の著作やアリゾナ州での研究事例の収集を行い、検討を進めた。（当初予定していたアリゾナ州の小学校訪問・授業見学はかなわなかった。）とりわけ、幼稚園（K）段階での言語発達の見取り（評価）について焦点を絞り、そこでの音素への気付き・音韻認識の見取りの理論的基盤や具体的方法について吟味を行った。

27 年度には、26 年度の成果を踏まえて、英語圏と日本における具体的なフォニックス指導の教材を収集し、指導方法ならびに系統性、子どもの言語経験との関連について分析を行った。（たとえば Jolly Phonics や Active Phonics など）。

またアメリカ合衆国のアリゾナ州に赴き、1990 年代にホール・ランゲージ・アプローチを展開し、依然として言語経験を尊重する実践を積み上げてきている Borton 小学校を訪問した。そこで、音韻認識の育成や基礎的な読み書き指導を、実際の言語経験を尊重する文脈のなかで展開する指導方法について調査・分析を行った。また、評価についても、ルーブリックの全般的な活用や、丁寧なつまずき分析（間違いの質的な分析）の観点から行う「カンファレンス」（子どもと教師が一対一で、読み書きについて指導・評価する機会）の様子を参観し、加えて教員へのインタビューを行った。（成果発表：平成 28 年度に教育目標評価学会で口頭発表を行った。）

28 年度には、Phonemic Awareness の指導、その発達を評価する Miscue Analysis にとくに焦点をあて、文字学習における発達段階を丁寧に見取る評価方法を具体的に検討、吟味した。その際、現在の読みの指導で大きな

影響を与えている教科書会社附属のリーディングキットにおいて、そのような目指されるべき丁寧な評価が行われているのかどうかを検討した。その結果、指導において多大な影響力を与えるリーディング教材付属の評価キットの分析からは、現在の指導現場ではそのような丁寧な質的な評価ではなく、読み間違いや書き間違いの「数」にばかり着目した量的な評価であった。すなわち、その間違いが意味のある間違いなのか（読みの発達として優れた気付きがあるからこその間違いなのか）、それとも単に理解不足による間違いなのか（その間違いに子どもなりの論理は隠れていない間違え）という吟味がなされないような評価用のワークシート（教師用）であることが明らかとなった。

ホール・ランゲージ実践校では丁寧に位置づけられていた読み書きの評価は、一般的な学校では位置づけられていないことが推測されたのである。そこで、平成 28 年度には、一般的な読み書き指導実践校（シラキュース市立の公立校）での参与観察と、教員へのインタビューを通して、文字への気付きを高める指導やその評価のあり方、現在の到達点や課題について実際の指導現場において検討した。結果として、一般の公立校においては、そのようなキットを用いて、丁寧に読みの指導をグループ単位や個別にしているものの、評価については教材会社附属の評価キットのワークシートに即して、「量的」な間違いをカウントしていることが主であることがわかった。ただし、そのようなワークシートでの評価を超えて、子ども一人ひとりが読みの指導で用いたワークシートを蓄積し、ポートフォリオを作成しており、それをもとに子どもの言語（読み書き）発達を見取っているという声もインタビューでは聞かれた。すなわち、丁寧な言語発達を読み取ろうとする視点は教師それぞれにはあるものの、具体的な評価方法としては明示化されてはおらず、明示化されている評価としてはどうしても量的な評価になってしまっているという現状が見られたのである。

（2）低中学年を視野にいれた「文字への気付き」を軸とした外国語活動カリキュラム試案の開発

平成 26 年度には、小学校低中学年から教科として英語を導入している小学校、外国語活動を行っている小学校を中心に、研究授業の参観や通常授業の参観および研究協議を行った（たとえば、岐阜県笠原小学校、京都市立高倉小学校、彦根市立の小学校など）。あわせて、小学校現場で、前回の科研費で作成した文字指導パンフレットの一部をもとにした出前授業を行い（山口県防府市立の小学校）、現場教員・英語専門教員とともに、小学校６年間の文字学習カリキュラムの開発について協議を行った。

平成 27 年度には、自治体レベルで低中学年から英語を教科として導入している京都市や大阪市、彦根市などの事例を収集し、参与観察も行った。また、文字指導についての意識調査（教員向け）を 7 月に行った研修（京都府北部研修）で行ったところ、73 人中 55 人（75%）が文字指導に対して「やや不安がある」「かなり不安がある」と答え、その具体的な指導方法を知りたいと考えていることがわかった。すなわち、一方では自治体レベルで低中学年より体系的な英語指導が進められ、一定の文字学習が進められているものの、一般の公立校においては、教員は具体的な文字学習のめざすべき方向性や具体的指導方法について、わからないことが多く不安を抱えていることも明らかになった。

そして、今ある教材を用いた、今からできる文字学習のヒントとなるものとして、前の科研費にて作成した文字学習パンフレットの一部の取り組みを改訂し、改訂版の取り組みを学校現場に研修等を通じて発信してきた。

平成 28 年度には、これらの成果として、最終的に、小学校低中学年の外国語活動を想定し、豊かな言語経験の実践例、文字への気付きを促す言語環境、教師の働きかけ、文字への気付きを見とる具体的な評価方法が依然として学校現場の課題であることから、それらを具体的な指導として可視化するための教材・小冊子『小学校外国語活動えいごの文字はっけん！ノート』および「教師用指導パンフレット」を作成した。

なお、これらの成果は平成 29 年 6 月の日本児童英語教育学会での課題研究（司会）時に学校現場の教員や小学校英語の研究を行う研究者に配布、フィードバックを頂いた。また、29 年 7 月には本研究の総括として小学校英語教育学会にて学会発表を行い、研究成果内容を発信するとともに、冊子を配布し、フィードバックを求める予定である。それらのフィードバックを踏まえて、改善点を集約し、さらなる改訂を行っていきたいと考える。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　５件）

１．赤沢真世「【教育改革ヘッドライン】小学校英語教科化の課題－これまでの実践の蓄積を整理して発展させるー」『教師のチカラ』日本標準、第 18 号（2016 年夏号）平成 26 年、pp.34-35.

２．赤沢真世「Springboard 指導例　音声指導から文字指導へ」『ＯＮＥ　ＷＯＲＬＤ　ＩＮＦＯ英語教育通信』教育出版、2016 春号、pp.11-12.

３．赤沢真世「音と文字をつなげる自主制作ワークブックの紹介」『英語教育』大修館書店、2016 年 7 月号、平成 28 年、pp.26-27.

４．浅井宗海・赤沢真世・芝野淳一・中井秀樹「グローバル時代における教員養成課程での学習プログラム構築に関する試論－学習支援システムを用いた英語による在外教育施設との交流に向けて－」『大阪成蹊大学紀要』第 2 号、平成 28 年、pp.251-260.

５．赤沢真世「【学術研究資料】小学校外国語活動における子どもの言語経験を尊重した文字学習－文字学習リーフレットの作成を通した目標・評価の検討－」『日本児童英語教育学会（JASTEC）研究紀要』第 35 号、平成 28 年、pp.107-120。

〔学会発表〕（計　４件）

１．赤沢真世「小学校英語教育のカリキュラムと評価をめぐる一考察 ーパフォーマンス評価に基づいた中高英語科スタンダード案からー」、日本児童英語教育学会関西支部春季研究大会（近畿大学）、平成 26 年 6 月 1 日。

２．赤沢真世「小学校外国語活動における文字指導 －音韻認識に注目した目標・内容の提案と評価の検討－」教育目標評価学会、第 25 回全国大会（群馬大学）、平成 26 年 11 月 30 日。

３．赤沢真世、「小学校外国語活動における文字指導パンフレットの検討」、日本児童英語教育学会第 35 回全国秋季研究大会(昭和女子大学)、平成 27 年 10 月 25 日。

４．赤沢真世「個に応じた読みの指導につながる評価のあり方－Miscue Analysis の再評価－」、教育目標評価学会（一橋大学）、平成 28 年 11 月 27 日。

〔図書〕（計　４件）

１．西岡加名恵・石井英真・田中耕治編『新しい教育評価入門－人を育てる評価のために』、赤沢真世「Column①何のための評価ですか？」平成 28 年、pp.17-18. 総 286 ページ.

２．田中耕治編著『グローバル時代の教育評価改革-日本・アジア・欧米を結ぶ』、赤沢真世「第３章　新しい評価法の考え方と進め方　序論　『目標に準拠した評価の登場と課題』」赤沢真世「第３章　新しい評価法の考え方と進め方　小括　新しい評価法をめぐる議論の到達点と課題」、日本標準、pp.156-159、pp.208-213. 総 292 ページ.

３．西岡加名恵編著『「資質・能力」を育てるパフォーマンス評価 アクティブ・ラーニングをどう充実させるか』、赤沢真世「第 2 章　教科教育におけるアクティブ・ラーニングの位置づけ方 2-8　英語」明治図書、平成 28 年、pp.92-100、総 144 ページ.

４．西岡加名恵・石井英真・田中耕治編著『戦後日本教育方法論史　下巻』、赤沢真世「第 5 章　英語科教育の変遷―「真のコミュニケーション能力」育成を問い続けて―」」ミネルヴァ書房、平成 29 年 2 月、pp.101-120、総 274 ページ.

〔産業財産権〕

○出願状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
http://univ.osaka-seikei.jp/department/education/teacher/74

６．研究組織
(1)研究代表者
赤沢　真世　（AKAZAWA　Masayo）
大阪成蹊大学　教育学部　准教授
研究者番号：60508430

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：

(4)研究協力者
(　　)